

良い絵を求めて

土曜日はよく画廊巡りをした。アパートから車で五分あまりの、レーニン通りに面した所にひとつ画廊があり、道順からいって大抵はそこから見始め、レーニン通りをモスクワの中心に向かってオクチャーブリの画廊、次にクレムリンの横を通り越して、ポリショイ劇場の裏手のペトロフカの画廊、最後が私の事務所の裏にあったクトゥーゾフ通りの画廊の四カ所にだいたいコースが決まっていた。

一般に展示する場所が明るくないと絵が暗く見えて映えないものであるが、どの画廊も申し合わせたように窓に白いレースのカーテンをかけ、昼間は照明をつけない。日本人のモスクワに駐在している人や駐在経験のある人からロシアの絵は暗くて陰気だというような話をよく聞く。また、モスクワを訪れた日本の画家が、絵が暗いのは絵の具が悪いせいではないかと疑っていたとかいう話を又聞きしたこともある。美術家中央会館に隣接する新トレチャコフ美術館に展示されている絵を見ても、確かにスターリン時代の絵は時代を反映してか、暗い絵が多いのも事実であるが、近年の現代ロシア絵画について言えば、決して絵が暗いということはなく、にもかかわらずそういう印象が強いとすれば、それは絵を見る場所が薄暗いことに原因を求めることが出来るであろう。

店を薄暗くしてあるのにはちゃんと理由があって、ロシア人にはそれで充分明るく見えるのである。それに気がついたのは、最初の事務所が日当たりが悪く、昼間でも薄暗かったため、視力を保護する必要から電気スタンドをつけていたところ、ある日秘書に眼に悪いから消してくれと言われたためである。ロシア人は日本人に比べて明るい所は眩しく、暗い所はよく見えるといった眼の構造になっているらしい。モスクワをよく知っている人なら、そう言われてみればと思いつくであろう。第二シェレメチボ空港の送迎ロビーが昼間、国の表玄関である国際空港にしては貧弱なくらいに薄暗いのに、照明をつけない理由もこれで説明がつくし、かつて街灯が足りなくらいであったモスクワの夜の薄暗い市街を走るロシア製乗用車のメインライトは、日本車に比べると目立って暗く(ただし、遠方を投射するビームライトは日本車と同じように明るい)、また薄明の夏の夜は車の多くがスモールライトだけで走っているというのもなるほどと納得がいく。私が駐在し始めた頃は、日本車をモスクワの街で見かけることはまだ珍しく、日本の明るさと高めの照射角度をそのまま持ち込んだ日本車のメインライトはロシア人にとっては明る過ぎるために対向車が眩しがって、必ずといってよいくらい、パッシングで消すように合図してきたものである。

ともあれ、薄暗い画廊でロシア人には普通の明るさに見える絵も、明るい所に住み慣れているせいで、暗い所に鳥目になっている私たち日本人には暗めに見えてしまう。特に現代ロシア絵画は光に敏感に反応する反面、暗い所では映えて見えない傾向があって、日本人の眼の見え方に合わせる場合は、もう少し明るい所で見ないと絵の真価が問えない。そのため、その点を考慮して、気持の上で明るさを補正して見る必要があるが、それを忘れずに注意深く見れば、薄暗い中でも良い絵を見分けることは可能である。

ロシアの現代絵画はジャンルとして宗教画、歴史画、風俗画、肖像画、裸体画、風景画、静物画、抽象画等があって、油絵のジャンルの総てが一堂に会したかのようであり、また

表現様式は幅広く多彩で、画風もさまざまであるが、画廊に展示されている作品の中心は何と言ってもリアリズム絵画の風景画や静物画が占め、ほかは時々見かける程度である。

もっとも、抽象画はそれ専門の画廊が何軒かあったようである。私にも抽象絵画の良さが解らないではないが、具象画ほどには関心が湧かなかつたために、友達に付き合っただけで二軒ほど立ち寄ったくらいで、自分からは進んで行くことがなかった。

水彩画も時には良いのがあった。色調が柔らかく透明感も高くて、水彩画ならではの独自の世界があるが、スケール感や色の細かいニュアンスの違いが出しにくいといった点で、私には何か物足りなさがつきまとう。駐在期間中、いろいろ興味を持って見ることは見たのだが、結局、手に入れるほど気に入る絵には出会わなかった。ただ、その意味するところは、絵の表現手段やジャンルにこだわらず、何でも出来の良い絵の中から一点選ぶとすればどれになるかといった観点から絵を篩(ふるい)にかけて見ているからで、同じ土俵で考えた場合は、油彩の方により大きな表現の幅があり、優れた絵同士を比較すると、どうしても油彩画が有利になってしまうということである。しかし、本来は水彩と油彩はそれぞれ別の表現手段として見るべきものであり、その意味ではロシアの水彩画もレベルの高い、注目に値する絵があることを申し添えておきたい。

私がよく訪れた四軒の画廊で、合わせて七百点ほどの油絵が展示されていた。一週間に一度、展示の絵の半分が新しい絵に替えられ、二週間で残りの半分が入れ替る。入れ替えは通常金曜日の夜に行われ、土曜日は新しい絵に対面出来るという仕組みになっていた。やはり土曜日は画廊の稼ぎ時なのであろう。一カ月で約千四百点ほどの絵を見る計算になるが、中には原則通り替えられずに暫く置かれている絵もあったようだし、見に行けない週もあり、また私が辿り着く前に売れた絵もあるであろうから、私が見た絵は、月千点弱と思われる。展示の絵はみんなそれなりのレベルにはあって、総じてどの絵を選んでもまず大きく外れることはなさそうな出来であった。しかし、その中でも特に優れた絵とそうでもない絵との出来映えの差はかなりあって、玉石混淆といった印象であった。当然玉の割合は少ないが、その玉の芸術レベルはなかなかの水準と思われた。また、玉の中でもいつもそばに置いて飽きがこないと言えるような、より力のある絵はさらに少なく、一般の画廊ではいつも出会えるというものではなかった。

日曜日は画廊が休みであったので、美術館や露天で行われている絵のバザール(市場)にもよく出かけたものである。絵のバザールといっても、腕時計やマトリョシカ(ロシアの代表的な木製人形。日本のこけしからヒントを得て作られ、大きさの違う人形を入れ子式にそれぞれの体内に納める)等の民芸品、切手やバッジのコレクションやアイコン等に混じって絵を路傍に立てかけて売っている。だいたいそれを描いた画家自身が売っていたようであるが、中には画学生の息子が描いた絵を母親が売っていることもあった。

はじめのうちよく行った所はイズマイロフ公園のバザールで、白樺の森の中にある遊歩道を五十メートルほど、道の両側に露店がひしめき合っただけで並んでいる。ロシア人の若い夫婦等がゆっくりと乳母車を押したり、小さい子供の手を引いたりして散歩がてらに立ち寄り、売り物の品定めを楽しんでいた。

それから暫くして、イズマイロフ公園のバザールは森から外れた別の場所に移されたことと教えてもらい、今度はそちらへ出向くようになった。金網の高めの柵に囲まれた、日陰の

ないその場所には中央アジアの絨毯が沢山進出するようになり、いつも人でごった返していかにもバザールという雰囲気になったが、その分絵の展示は減ってしまった。

アパートから遠いこともあって、それで自然に足が遠退いたが、そうこうするうちにまた、イズマイロフからはじき出されたと思われる絵の露店がオクチャーブリの画廊に沿った歩道に並ぶようになって、画廊や美術館に行く時等によく立ち寄った。絵の露店はそこで一年かそこらの間、外国人の観光客や出張者、モスクワの市民たちで結構賑わっていたが、その後、そこからさらに徒歩で十分足らずの内環状線を挟んでゴリキー公園の向かいにある美術館、美術家中央会館の広場の前の歩道に移された。

絵のバザールは、はじめロシア人の友達に勧められて、良い絵が沢山あるという触れ込みだったので期待して見に行った。露天で白日のもとに見る絵は良く見えるはずであるが、全体のレベルは画廊よりはるかに落ちるかなというのが正直な印象であった。午後出かけたので、良い絵はひょっとして午前中に売ってしまったのかとも考え、次回からはなるべく午前の早い時間に行き着くようにしたが、どうもそういうわけでもないらしかった。全部で二百点かそこら展示されていて、中には美術館にある有名な絵を模写した絵があったりする。ほとんどが油絵で、抽象絵画や宗教画ほかいろいろなジャンルの絵やさまざまな画風の絵がある。ジャンルから言うと、やはり多いのは風景画であった。

その風景画について言えば、それを描いた画家そのものの力はそれなりにあるはずなのに、売るために描かれたというか、ちょっと安易に流れて手抜きをしたという感じのする絵が目立ったのが気にかかる場所であった。デッサン能力は充分あって、返す返す残念に思うのであるが、色遣いがきれい過ぎるために、現実離れした絵になっている。現代ロシア絵画の主流は十九世紀後半以来の伝統的な写実主義で、平たく言うと、自然や街並み等の風景を現実的に即して絵に再現する画法である。それらの絵も写実主義の伝統に則ってはいるが、現実から汲み取ったものを表現するためにはもっと魂を込めると言うか、感性が求められるところから従ってもっと多種多様な色を加えなければならないところを、ちょっと見には人目を惹くようなきれいな色彩で時間をかけずに短絡的に、画一的に仕上げているという感じがする。

実を言うと、どういう彩りで描くかということが、大家とそうでない画家の分かれ目になる重要なポイントであり、紙一重のようであっても、その隔たりは才能と努力なくしては埋めることの出来ない大きな差なのである。そのような描き方で画家の力量が伸びるはずはなく、私としてはもっと自分に挑戦して、背伸びをしてもらいたい気がした。

友達付き合いをしていたロシア人の画家から駐在も終る頃になって聞いた話であるが、画廊はソ連芸術家同盟(ソ連崩壊後、ソ連芸術家同盟はなくなり、その機能はそれぞれの独立した共和国の芸術家同盟に引き継がれた。これ以降は混乱を避けるため、ソ連芸術家同盟を明示する必要がある場合を除いて、ロシア芸術家同盟と総称する)によって運営され、会員の作品販売の受け皿になっている。そのため、その会員でない画家はそれらの画廊からは締め出されているということで、それでやむなく彼らは露店で絵を売るようなことになっているらしい。

とは言え、露店にもまともな絵がなかったわけではない。それで、頬髯と顎鬚を生やした友達のその画家は、絵の専門学校で絵を教えていたこともあり、性格は陽気で、且つロシアの大地のように広い心を感じさせるところのある愛すべき男であったが、画廊のその

話をしてくれたついでに、露店出身の画家の出世話を熱っぽく、力を込めて語ってくれた。何でも、露店で絵を長年売っていた画家で、その下積みの中から実力が認められて一躍有名になった絵描きがいたらしい。彼は露店にも良い絵があるとは直接言わなかったが、そのエピソードを力説することにより、そう言いたかったのであろう。彼のその話は別にしても、露店にも数は少ないものの、それなりの絵があったことは私も承知しており、そこで気になる絵に出会ったことも何度かあって、実際に何点かの絵を買い求めている。

また、一九七四年時点の古い資料で恐縮だが、旧ソ連芸術家同盟の会員は画家が約八千名いて、会員を志望し申請中の画家が七千名いたという。その数字は私の駐在当時、無論多少の違いはあったであろうが、大筋では大きな変動はなかったと思われる。その予備軍の数字から言って、滅多に露店に顔を見せない画家が飛び入りで才能溢れる絵を展示する可能性は充分あり得たわけで、私が露店に時々出かけていったのには、そういう可能性を期待する楽しみもなくてはなかったのである(ただし、一九九八年に二回目のモスクワ駐在をして気づいたことであるが、芸術家同盟系の画廊が一九九三年以降徐々に淘汰縮小を余儀なくされた結果として、露店にも比較的良い絵が流れるようになって、近年露店の絵画状況も多少様子が変わりつつあるようである。右に述べた状況は、それゆえ、私が最初に駐在した時期の印象であることをご理解頂ければ、幸いである)。

絵を見る場数を踏んでいくと自然の成り行きとしてロシア絵画に対する理解が深まる。それには、勿論、優れた絵を数多く鑑賞することが大事であるが、それと同時に難点のある絵を見ることも、絵の理解を深めるのに必要なことであり、それによって、絵を描くということがいかに才能と年季を要する難しい芸術であるかということを実感出来ようになる。

一般にロシアの風景画家は基礎がしっかりしていて、通常、人物もそれなりに描くし、静物も描きこなすという印象を受けるが、それでも絵の対象を常にうまく描けるとは限らない。川の水が逆巻いて落ち込む様子は水の勢いを自然に表現するのが容易ではないし、人物や疾駆している馬等を実在感や躍動感があるように描くのも、同様に難しい。画廊に群像を描いた歴史画がたまに出るが、大抵は人物が描き足りない感じがする。人物はそれを表現する色合いに深みがないと重みが出にくい。また、担いでいるバケツに水が入っているならバケツの重さが判るようであればならないし、空なら担ぐ人の姿勢が自ずと変わってくるというものである。そういった点がうまく描けていても、時には、構図の取り方が適切でないために、どことなくちぐはぐな、せせこましい感じに陥った絵に出会うこともある。構図は絵の描写意図を効果的に表現し得る視点から、ゆったりと見映えのするように捉えるのが原則のようであるが、失敗例をたまに見ることからも、それをいつも成功裏に実現するのは必ずしも容易でないことが窺われる。

芸術レベルの高い作品はそのような難点を全部クリアーして、構図、デッサン、色彩バランスと三拍子揃ったものになっているわけであるが、その三要素の中でも色彩にかかわる事柄が一番学びにくく、画家の生得の才能に深く結びついているように思われる。

いずれにしても、絵画鑑賞のかたわら、時間をかけて良い絵を探し求め、気に入った絵を少しずつ蒐集していったのであるが、以降の章ではそれらの絵の一部を目的別に選んでお目にかけることにしたい。